

平城宮跡・平城京跡出土の木簡

平城宮跡発掘調査部

1987年度の発掘調査では、
平城宮跡で1ヶ所、平城京跡
で2ヶ所の、合わせて3ヶ所
の遺跡から木簡が出土した。
各遺構の出土点数は、表のと

	調査地区	次数	出土遺構	点数(削屑)
平城宮	朱雀門東	157補	SD3715	36(23)
平城京	左京三条二坊七坪	184	SE117等	15(12)
	左京三条二坊二・八坪	186	SE180等	229(109)
	左京二条二坊十四坪	189	SE40	1
	計			281(144)

うりであり、総点数は281点となる。うち主要木簡の釈文は「平城宮発掘調査出土木簡概報20」(1988年5月刊)に収録したので参照されたい。ここでは内容に興味あるものにつき報告する。

朱雀門東地区(157次補足調査)

朱雀門の東、南面大垣と第一次朝堂院の東を南流する大溝SD3715とが交差する地点の調査で、1984年の157次調査を補足するものである。SD3715は、南面大垣部分は開渠であることが判明し、その部分の南面大垣は、板塀などで遮閉されていたものと考えられる。木簡は、SD3715から出土した。判読できるものは少ないが、「中等」とあるものが考課に関わるものとすれば、調査地点の北東に推定される兵部省に関わるものと考えられる。

平城京左京三条二坊一・二・七・八坪(184・186次調査)

左京三条二坊一・二・七・八坪を、1986年秋以降継続して発掘調査をしているが、1987年度には、184次調査で井戸SE116から1点、井戸SE117から11点(うち削屑9点)、掘立柱建物SB143から2点(2点)、井戸SE163から1点(1点)、また186次調査では井戸SE180から228点(108点)、井戸SE211から1点(1点)が出土した。計244点である。なお当調査地の1986年度出土の113点については、年報1987を参照されたい。調査は継続中であるが、1988年3月現在で確認の遺構は、掘立柱建物117棟以上、掘立柱塀40条以上、井戸24基、溝35条以上と多数にのぼる。それらは、大きく・A・B・C・Dの4時期に分けられる。A期は奈良時代前半期で、各坪間の坪境小路はなく、4町が1つの宅地として使用された時期である。敷地中央の正殿SB210(7×5間南北廂付東西棟)を中心にして殿舎が配置されその区画の周囲を掘立柱塀がめぐる。B期は奈良時代中期で各坪間に坪境小路が作られ、1町単位以下の宅地となるが、奈良時代後半のC期となると再び坪境小路はなくなり、4町の敷地となるが、この時期には建物は敷地全体に散在し、区画塀は存在しない。D期は奈良時代末期から平安時代初めにあたるが、再び坪境小路ができ、坪内に小規模な建物が建つ。木簡出土遺構は、SE117・180とSB143はA期、SE116・163はC期、SE211はD期に属する。そのなかで特に注目されるのは、SE180である。この井戸は、八坪東南辺で検出され、現状は井戸枠はすべて抜き取られており、南北1.9m、東西2.3m、深さ2mの土壇である。土壇は上から砂質層・粘土層・木屑層・粘土層と層位をしており、木簡はすべて木屑層からの出土である。木簡の年紀は、「靈龜3年(養老元年)」

(717) に限られ、この井戸は、養老元年以後程なく埋められたものであろう。出土木簡で、特に注目されるのは、(1)～(3)で、いずれも「長屋宮」と記され、長屋王の宮へ送られてきた米俵につけられた荷札である。荷札の書式は、調庸などの貢進物荷札と異なって、宛先が冒頭にある。この書式は、調査地に南接する宮跡庭園出土の北宮宛木簡と共通性がある。これらの木簡が A 期の 4 町占地の宅地内から出土し、その結果奈良時代初めのこの宅地の主が、長屋王であったことが判明したことの意義は大きく、発掘調査により宅地の実態とともにその主が判明した最初の例といえよう。なお、天武天皇の孫である長屋王に、皇・宮の表記が使われていることについては問題が残る。さらに帳内・少子への飯支給木簡(4・5)がある。帳内は、親王・内親王に支給されたトネリであり、長屋王邸における帳内の存在がわかる。少子は「侍少子」とあるように、貴人に侍り身辺の諸事に従事したものであろう。また犬に飼育料かと思われる飯を支給した木簡もある(6)。これらの木簡は奈良時代の貴族の邸内の実態に関わる貴重な史料といえる。荷札木簡で国名の判るのは 7 点で、うち武藏国・菱子や伊豆国・荒堅魚の国郡郷の表記のある貢進物付札のほかは、郡名から始まるものがあることが注目される。郡名は、犬上郡・蒲生郡でともに近江国であり、近江に長屋王の封戸か庄の存在が考えられよう。また小箱の外面に書いたと思われるものもある(7・8)。なお 1988 年 8 月以降、当該地の調査で数万点に及ぶかと思われる多量の木簡が出土した。それらの解明により、長屋王邸内の実態が明かとなり、奈良時代の貴族生活の研究に貴重な史料となることが期待できる。

平城京左京二条二坊十四坪の調査(189次調査)

当該坪の南端部にあたり、奈良時代の遺構としては、掘立柱建物 32 棟、掘立柱塀 12 条、井戸 1 基などで、木簡は万年通宝や斎串などとともに、奈良時代末から平安時代初期の井戸から出土した。「海藻根」とある。この遺跡からは、奈良市域初の旧石器が出土した。(綾村 宏)

第一八六次出土木簡(口絵掲載)

(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)
此取人者御六世□	此取人者逃女成	・六月一日麻呂	・侍少子 少子上老 半足甘 君酒連 麻呂 多比 右	・ ^西 翁帳内 廣万呂少野種 一日 一斗 飯斗 老朝受則 廣万呂養老元年十一月廿日	・長 ^屋 宮一石 羽昨直鳴 長 ^屋 宮一石 羽昨直鳴	・羽昨直鳴 一石春人夫	・長屋 ^宮 一石春人夫
		・犬六頭料飯六升瘡男	・十四口飯一斗八升 委見六廿ヶ月七日	・ ^西 大 土師梗万呂泰望万呂大伴			
				二日			
				飯斗 老朝受則 廣万呂養老元年十一月廿日			
				351・23・4 011	160・18・6 033	162・21・5 033	175・25・6 051
116・19・3 011	140・19・3 011	165・23・5 011	207・21・5 011				